

# 謝无量と日本における中国哲学研究

張 子 康

Xie Wuliang and the Study of Chinese Philosophy in Japan

ZHANG Zikang

## Abstract:

In 1916, Xie Wuliang (謝无量) made a significant mark by publishing the first *History of Chinese Philosophy* authored by a Chinese scholar. Xie produced also a series of works which examined various aspects of Chinese philosophy, including studies on Laozi, Confucius, the Yangming School, and Buddhism. These works positioned Xie as a pioneer in the field of Chinese philosophical inquiry. However, it is crucial to note that several of Xie's works were not original creations but rather compilations of works directly derived from the Japanese sources. Notably, *the History of Chinese Philosophy* attributed to Xie was essentially a translated version of Takase Takejiro (高瀬武次郎)'s work with a similar title. This reliance on the Japanese studies highlights an early trend in the Chinese philosophical studies, characterized by the adoption and imitation of the Japanese research on "Chinese philosophy" and "Eastern philosophy."

Keywords: Xie Wuliang, history of Chinese philosophy, oriental philosophy,  
Takase Takejiro

キーワード：謝无量、中国哲学史、東洋哲学、高瀬武次郎

## はじめに

謝无量（1884-1964）、元名は蒙、後に无量と改名した。中国近代の著名な学者、詩人、書道家。中国哲学研究の先駆者と評価されている。謝氏は民国初期において中国哲学や文学研究に関して、数多くの著作を出版し、大きな影響を与えたと言われている。<sup>1)</sup> その中に中国近現代において最初の中国哲学史の

---

1) 謝无量の学術と影響に関する代表的な研究は、次のものがある。

劉長榮、何興明（2006）『國學大師謝无量』北京：文史出版社。

石鳳珍（2009）『謝无量先生學述』中國藝術研究院博士後出站報告。

覃江華（2015）『謝无量倫理思想研究』武漢大學博士學位論文。

著書とされている『中国哲学史』のようなものもある。近年において中国の学界は、『謝无量文集』<sup>2)</sup> 全9巻の出版をきっかけとして、謝无量に関する研究がますます盛んになってきた。

しかし、謝无量の研究は日本側の研究を模倣したあるいは盗作したというような疑いも学界においては存在している。謝无量と同時代の学者である梁漱溟、宇野哲人、諸橋轍次らは、謝氏の『陽明学派』『中国哲学史』『詩経研究』が実際に日本で「翻訳」されたことを指摘し、現代においては劉岳兵、李慶らも、謝氏の『孔子』『中国哲学史』と日本との関係を論及した。以上のような学者の論述の多くは推測にとどまり、具体的な説明がなく、適切でないものもある。

例えば宇野哲人(1875-1974)は「その後私どものが出たあとで、謝无量という人の支那哲学史が出て、その哲学史はおかしいけれど私の哲学史講話と非常によく似ているのです。あるいは私のを少し、やったんじゃないかと思えますがね。後いろいろ立派なものが支那にも出ましたけれど、いちばんはじめはその謝无量ですよ。」<sup>3)</sup>と主張した。李慶も、「中国で最初に出版された『中国哲学史』は、謝无量が書いているといわれているが、宇野の『支那哲学史講話』によく似ているのが興味深い」<sup>4)</sup>と指摘したことがある。ただ筆者の調査によれば、宇野のこの1914年に出版された『支那哲学史講話』は確かに謝无量の『中国哲学史』に似ている点が多いが、両者には直接的な関係がないと思われる。

その他の既存の観点は以下の具体的な論述の際に紹介する。全体的に見ると、謝无量と日本側の関係については、学界においてはたまに言及されているが、十分に検討されていないことも事実である。そのため、現在謝无量を研究している学者は、謝无量の中国哲学研究の著作が日本の影響を受けたのであろうと推測しているが、謝氏自身が書いたものと考えている。例えば、覃江華は『謝无量倫理思想研究』の「域外學術思想の影響」の一節で日本の影響に言及して、「謝无量の一部の著作の中で、日本学者の同類著作の影響を発見することは難しくない」と述べたが、具体的に展開して論述しなかった、『中国哲学史』などの論著は謝无量の自作と見なしている。<sup>5)</sup>

本稿は、まず先行研究を踏まえながら、謝无量が参考している日本の文献を調査し、近代中国哲学研究の源流と日本との関係を明らかにすることによって、謝氏への再評価を提起したい。

## 一、謝无量と中国哲学研究

謝无量の本籍は四川省梓潼で、1884年6月に四川樂至に生まれた。小さい頃その父の謝維喈は安徽蕪湖県知事に就任したとき、謝无量は父に従って幼い頃から伝統的な儒学教育を受けたという。15歳の時、謝氏は湯寿潜(1856-1917)に師事し、親友馬一浮(1883-1967)と知り合うことになった。その後科挙にも参加せず、新式学校に入学することに決意した。18歳の時に南洋公学に入学した謝无量は、馬一浮、馬君武(1881-1940)と共に「支那翻訳会社」を設立し、『翻訳世界』という雑誌を刊行した。この雑誌

2) 謝无量(2011)『謝无量文集』北京：人民大學出版社。

3) 宇野哲人(1962)「学問の思い出す—宇野哲人博士—」『東方學』24：137。

4) 李慶(2010)『日本漢學史：第二部、成熟與迷途』上海：上海外語教育出版社：176。

5) 覃江華(2015)『謝无量倫理思想研究』武漢大學博士學位論文：42。

においては蟹江義丸（1812-1904）の『哲学史』などの日本の論著が翻訳され、日本側の研究成果を重要視している。1903年、『蘇報』事件<sup>6)</sup>の影響により、謝无量は日本に流亡し、翌年9月に帰国した。この期間において、外国語を学習し、多くの外文書籍を読んだという。<sup>7)</sup> 謝氏がその後出版した著作から見れば、明治日本の学術思想に深い影響を受けていることは確実である。

謝无量は帰国後、『京報』、『民権報』、『独立週報』と『神州日報』など数多くの新聞紙の主筆を担当した。また、安徽公学や四川存古学堂などにおいて教鞭も執り、学界においてようやく頭角をあらわした。1914年、政治情勢が深刻になったため、謝无量は新聞紙の仕事を辞め、中華書局に就職することにした。その後の数年間に書物の編纂と著作に専念した。1914年から1918年にかけて、少なくとも23冊の著作を完成し、その中に『新制哲学大要』、『新制哲学大要参考書』、『倫理学精義』、『陽明学派』、『孔子』、『韓非』、『朱子学派』、『仏学大綱』、『中国哲学史』と『王充哲学』などの哲学研究が含まれている。

これらの著作のほとんどは各領域において「開山の作」と呼んでも過言ではない。葛兆光は謝氏について「新しいテーマを占領するにはとてつもなく素早い」<sup>8)</sup>と批判したことがあるが、『中国哲学史』、『孔子』、『陽明学派』や『仏教大綱』などの著作は、学界においては謝氏による「創造的な貢献」として認めている。<sup>9)</sup>

しかし、謝无量が携わった「中国哲学研究」と日本における「支那哲学」「東洋哲学」との関係はまだ明白にされていない。謝氏による『中国哲学史』などの論著が近代中国学術史において重要な地位を占めていることから見れば、氏の研究の源流は無視できない問題だと思われる。

## 二、謝无量の哲学研究と日本の関係

先に述べたように謝无量氏は中華書局に入社した後、哲学研究の論著を大量に著した。管見の限り、これらの著書の多くは、もともとなる日本語の種本が確かに存在している。日本側の原本に基づいて資料を加えたり、簡略化したりするものもあるが、そのまま翻訳したと言えるものも少なくない。以下は、筆者が調査した謝无量の哲学研究の論著とそのモデルである日本語原本のリストである。

6) 『蘇報』は1896年に創刊。1903年愛国学社の機関紙となり、排満革命の宣伝紙としての役割を果たした。同年、鄒容の『革命軍』が出版され、『蘇報』には「読〈革命軍〉」「序〈革命軍〉」「紹介〈革命軍〉」などの推薦文を発表した。また、章炳麟は「康有為を駁して革命を論ずる書」を『蘇報』に連載した。『革命軍』と「康有為を駁して革命を論ずる書」は公然と清朝打倒を主張するものであり、知識人への大きな反響を呼んだ。そのため章炳麟、鄒容など『蘇報』に関係する6人が逮捕されるに至る。

7) 謝无量の生涯については、主に以下の文献を参考にした。

謝无量「自傳」（手稿本）、楊偉立、馬宣偉（1997）『謝无量』所収、北京：中華書局。

彭華（2009）「謝无量年譜」『儒藏論壇』1。

8) 葛兆光（2004）『中國思想史：導論思想史的寫法』上海：復旦大學出版社、3-4。

9) 田文軍、楊姿芳（2007）「謝无量與中國哲學史」『江海學刊』5：31-32、柴文華（2008）「論中國哲學史學科的創立及詮釋框架」『哲學研究』1：41。

タイトル	出版年	原著者・訳者	原著のタイトル	原著の出版者・年月日
新制哲学大要	1914年	フォン・キルヒマン 著、 藤井健治郎訳	哲学汎論	博文館、1899年
新制哲学大要参考書	1914年			
老子哲学	1915年	高瀬武次郎	老荘哲学	文盛堂、1909年
陽明学派	1915年	高瀬武次郎	陽明学新論	文盛堂、1906年
孔子	1915年	蟹江義丸	孔子研究	金港堂、1904年
仏学大綱	1916年	井上哲次郎、堀謙徳	釈迦牟尼伝 増訂	前川文栄閣、1911年
		蜷川竜夫	仏教倫理学	博文館、1906年
		凝然	八宗綱要	1268年
中国哲学史	1916年	高瀬武次郎	支那哲学史	文盛堂、1910年
詩経研究	1923年	諸橋轍次	詩経研究	目黒書店、1912年

以上の著作と各日本語原本との関係を具体的に説明する。

1. 『新制哲学大要』<sup>10)</sup> は西洋哲学の入門書とされて、その概要は『新制哲学大要参考書』とほぼ一致しており、後者の説明はより詳細である。『新制哲学大要』の「編輯大意」には、「本書の（筆者注：哲学に関する）分類の方法は編者が独創したものであるが、主にドイツのKirchmann氏の『哲学的汎論』及び、他の書も参考した」<sup>11)</sup>と著している。Kirchmannとはドイツの19世紀の法学者、哲学者、政治家である、ユリウス・フォン・キルヒマン（Julius Von Kirchmann、1802-1884）を指している。実際に、『新制哲学大要』と『新制哲学大要参考書』はKirchmann氏の著書から由来したものではなく、基本的に藤井健治郎（1873-1931）の訳本から二重翻訳したものである。『新制哲学大要』は哲学を「知の哲学」と「実在の哲学」（「物の実体」、「心の実体」、「人生哲学」）に分けている。この分類の仕方は藤井氏の翻訳本と全く同じで、つまり、それは謝氏の「独創」とは絶対に言えないということである。

2. 「老子哲学」<sup>12)</sup> は雑誌『大中華』1915年第1巻第4期から第6期にかけて掲載されている。実際にこの文は高瀬武次郎（1869-1950）『老荘哲学』の第1編「老子哲学」を翻訳したものである。高瀬『老荘哲学』の特徴は、西洋の漢学者の研究をたくさん参考にし、英語の原文をそのまま用いていることであるが、謝氏の文章もこれらの引文を残していることである。高瀬武次郎は1898年に東京帝国大学文学部漢学科を卒業し、同大学院に進学した。1905年に論文「先秦諸子哲学」を提出して文学博士号を取得し、1907年京都帝国大学で助教授を務める。1912年から1915年まで清や欧州に遊学し、帰国後は京都帝国大学支那哲学史教授に就任した。<sup>13)</sup> 謝无量は氏の成果をたくさん利用した。

3. 『陽明学派』<sup>14)</sup> はほとんど高瀬武次郎『陽明学新論』の翻訳であり、わずか一部の内容が自作とされている。梁漱溟（1893-1988）は『陽明学派』に対して「この本は、謝君が日本人の著書を底本にして書いた本らしい。おそらくその中の誤りは日本側から由来したものであり、謝君は検証せずにそのまま

10) 謝蒙（1914）『新制哲學大要』、上海：中華書局。

11) 謝无量（1914）「編輯大意」、『新制哲學大要』所収、上海：中華書局：1。

12) 謝无量（1915）「老子哲學」『大中華』1(4)-(6)。

13) 吉田公平（2006）「高瀬武次郎年譜稿 東洋大学の漢学者たち（その一）」『井上円了センター年報』15。

14) 謝无量（1915）『陽明學派』、上海：中華書局。

使用したかもしれない<sup>15)</sup>と批判したことがある。高瀬武次郎は陽明学の研究者として著名であり、その関連書物が10冊も著している。『陽明学新論』が出版する前にすでに『日本之陽明学』（1898）、『陽明階段』（1899）、『王陽明詳伝』（1903）の3冊が成立している。『陽明学新論』は、近代日本や中国において、紛れもなく代表的な陽明学研究の成果である。

4. 謝无量の『孔子』<sup>16)</sup>もその内容がほとんど蟹江義丸の『孔子研究』から編訳したものである。劉岳兵は目録の一致に基づき、両書の間「必ず密接な関係がある」<sup>17)</sup>と指摘している。両本を比較してみれば、一部の改編以外謝无量の『孔子』は基本的に蟹江義丸の簡略版であることがわかる。『孔子研究』は明治37年（1904）蟹江義丸が著したものである。蟹江はその前年『孔子研究』で東京帝国大学文科大学の文学博士号を取得していた。『孔子研究』は明治時代の日本において孔子研究の最も重要な代表作であり、中国の学術界にも大きな影響を与えている。『孔子研究』が出版された同年、清末の雑誌『教育世界』に『孔子研究』の第2部分である「孔子の学説」が連載された。訳者は未署名であるが、おそらく当時の主筆であった王国維（1877-1927）とされている。1925年、錢穆（1895-1990）は『論語要略』（別名は『孔子研究』）において孔子の事蹟と性格を述べるに際し、蟹江『孔子研究』を参考したのだという。<sup>18)</sup>

5. 謝无量の『仏学大綱』<sup>19)</sup>の源流は比較的に複雑である。この本の上巻の第一・二章はほとんど井上哲次郎（1855-1944）と堀謙徳（1872-1917）との共著『釈迦伝』から使用したものである。特に第1章9節「釈迦十大弟子」、第2章1節「印度仏教略述」2節「仏教東渡略述」はほぼそのまま翻訳したものである。また、上巻の第3章「東土仏教流伝之十宗」は東大寺僧凝然（1240-1321）の『八宗綱要』（原文漢文）からの抜粋である。『八宗綱要』は鎌倉時代華嚴宗の代表的学僧凝然が29歳のとき著した仏教概説書、今日でも日本仏教の古典・入門書として広く読まれている。「室町、戦国時代、江戸時代にも『八宗綱要』は初学者の入門書として伝えられたが、再び脚光を浴びるようになったのは明治時代になってからである。」<sup>20)</sup>明治時代に『八宗綱要』と関連書が盛行した影響で、謝氏はこの本に注目した。「八宗」とは、俱舎宗、成実宗、律宗、法相宗、三論宗、天台宗、華嚴宗（『仏教大綱』は賢首宗）、真言宗（『仏教大綱』は密宗）を指している。『八宗綱要』は「八宗」の宗名、成立、教説を概説しており、謝氏の『仏教大綱』と全く同じである。しかし、凝然は最後に禅宗と浄土宗について簡略に言及するだけで、謝氏の『仏教大綱』の中で禅宗と浄土宗についての論述の出所は不明である。『仏教大綱』下巻第三編「仏教倫理学」は、蜷川龍夫（1876-1941）の著書『仏教倫理学』から編訳したものである。『仏教大綱』下巻においては仏教論理学や仏教心理学も論じられており、日本にも当時研究書がたくさんあったが、『仏学大綱』がどれほど引用したのかはいまだ不明確である。謝无量氏は多くの日本の仏教研究成果を集めた。『仏学大綱』はこれらの著作を融合させたものであるが、その中には謝氏独自の見解もあるはずだと

15) 梁漱溟（1989）「評謝著『陽明學派』」、『梁漱溟全集4』所収、濟南：山東人民出版社：702。

16) 謝蒙（1915）『孔子』、上海：中華書局。

17) 劉嶽兵（2007）「近代日本の孔子觀」、『中日近現代思想與儒學』所収、北京：生活・讀書・新知三聯書店：128。

18) 拙論（2021）「『夫子歸來』——蟹江義丸の『孔子研究』在中國學界的流傳與影響」『孔子研究』4。

19) 謝蒙（1916）『佛學大綱』、上海：中華書局。

20) 佐藤厚（2009）「境野黄洋の『八宗綱要』解説について」、境野黄洋『境野黄洋選集 第七卷』所収、東京：USS出版：614。

思われる。

井上哲次郎は日本東洋哲学研究の創始者であり、明治時代後期から大正、昭和初期にかけて活躍した。<sup>21)</sup> 堀謙徳と蜷川龍夫は井上の学生である。堀謙徳は眞宗本願寺派専琳寺住職であるが、東京帝国大学文科大学を卒業し、渡米してコロビア大学で修士号を取得した。帰国後、東京帝大文科大学講師を勤める。著書に『美術上の釈迦』、『解説西域記』、『印度仏教史』と『釈迦牟尼伝』などがある。<sup>22)</sup> 蜷川龍夫は明治9年(1876)富山県生れ、1904年東京帝国大学文科大学漢文学科を卒業し、大学院に入り、インド哲学を専攻した。後に外山高等学校長、大谷派教学部長等を歴任した。著書は『孔夫子伝』『日蓮上人伝』『仏教倫理学』『儒教哲学論』などがある。<sup>23)</sup>

6. 謝無量の哲学著作の中で最も重要なのは『中国哲学史』<sup>24)</sup> であり、中国現代学術史上初めての「中国哲学史」として高く評価されていると同時に、この本の批評をめぐって論争もたくさん存在している。謝著の学術価値と影響力は胡適の『中国哲学史大綱』にはるかに及ばないと学界において認識されているが(謝無量の『中国哲学史』は民国時代に12回も再版され、当時に非常に人気があったと思われる)、近年においての学者が謝氏の著書を重要視し始めている。

在談到中國哲學史學科的創立時，人們更多關注的是胡適的《中國哲學史大綱》(上卷)，認為這部著作具有劃時代的意義，而謝無量的《中國哲學史》主要是以經解經，沒有跳出經學的窠臼。如果我們尊重歷史事實從文本出發的話，那麼可以說，謝無量的《中國哲學史》是中國人寫的第一部中國哲學史，中國哲學史學科的開山之作，它雖然具有較濃郁的傳統味道，但也不乏對哲學的現代理解，並運用西方哲學的框架對中國哲學作了初步解讀，蘊涵了“以西釋中”的詮釋傾向。<sup>25)</sup>

柴文華は謝著『中国哲学史』の「開山の作」としての重要な地位を肯定した。しかし、謝氏の『中国哲学史』は、ほとんど高瀬武次郎の『支那哲学史』を編訳したものである。高瀬氏の『支那哲学史』は日本の明治後期を代表する中国哲学史の一つとして、当時一部の中国学者にも推賞されている。たとえば趙蘭坪(1892-1967)は、この本を中国の学界の不足を補うための「他山の石」と見なし、趙氏の『中国哲学史』は高瀬氏の著書に基づき、「自分の意見を少し参考にして、註釈を加えて、その大意を採って、平易な文語に訳した」<sup>26)</sup> ことによるものだ。一方、謝氏の『中国哲学史』は、高瀬の『中国哲学史』に対して、わずかな加筆・削除を行っただけで、趙蘭坪の「訳本」と根本的に異なるところはない。また、謝無量の改訂は原著の問題点を拡大するところがある。まさに謝無量氏の改訂で、胡適(1891-1962)の強い不満を招いた。

21) 今西順吉(2001)「井上哲次郎の開拓者の意義」『印度學佛教學研究』49(2):20.

22) 日外アソシエーツ株式会社編(2004)『20世紀日本人名事典』東京:紀伊國屋書店.

23) 同上

24) 謝無量(1916)『中国哲學史』、上海:中華書局.

25) 柴文華編(2018)『中国哲學史學史』北京:人民出版社:234.

26) 趙蘭坪(1925)「趙蘭坪序」、『中国哲學史』所収、廣州:国立暨南學校出版部:3.

今人談古代哲學，不但根據《管子》、《列子》、《鬻子》、《晏子春秋》、《鶡冠子》等書，認為史料，甚至高談“遂古哲學”“唐虞哲學”，全不問用何史料。最可怪的是竟有人引《列子·天瑞篇》“有太易，有太初，有太始”一段，及《淮南子》“有始者，有未始有有始者”一段，用作“遂古哲學”的材料，說這都是“古說而諸子述之。吾國哲學思想萌初之時，大抵其說即如此！”（謝无量《中國哲學史》第一編第一章，6頁）。這種辦法，似乎不合作史的方法。<sup>27)</sup>

また次のような文章がある。

依我看，那些“生而皓首，故称老子”的話，固不足信（此出《神仙傳》，謝无量《中国哲学史》用之）……<sup>28)</sup>

胡適が『中国哲学史』の中で謝无量を直接批判したところは、すべて謝氏自身の加筆しているところであり、これはただの偶然ではないと思われる。

7. 『詩經研究』<sup>29)</sup> は単なる文学研究ではなく、『詩經』を中国の上古時代の歴史及び思想史研究の史料としているため、哲学研究にも属される。謝氏の『詩經研究』は諸橋轍次（1883-1982）の著書『詩經研究』を翻訳したもので、内容は一部削除され、構成も若干調整されている。諸橋轍次は『大漢和辞典』、『広漢和辞典』の編者として著名である。主な研究領域は中国の儒学や古典であり、『詩經研究』は諸橋轍次の処女作である。諸橋氏は中国で留学経験があり、多くの中国学者と知り合い、中国の学術界にも詳しいため、『詩經研究』の出版事情に気づき、「思い出してみると私の処女作『詩經研究』も、かつて上海の学者謝无量によって盗訳せられ、謝无量著として出版されたことがある。重ね重ねの災難だ。しかし友邦の人だけを責めるわけにはいかない。」<sup>30)</sup>と述べた。

以上のことから見れば、「先駆作」と言われている謝氏の著書は殆ど日本語の種本にもとづいて作り上げた「翻訳本」と考えてもよい。またその他の哲学著作の出典はまだ不明確だが、日本の影響を受けていることは間違いない。

### 三、「中国哲学史」の成立と日本

現在の中国学界において、前述の書物は謝无量の自作と見なしている。したがって、謝氏は中西哲学を融通し、中国哲学史研究を開拓した先駆者として、高い評価が与えられている。しかし前文が論じたように、謝无量が署名した哲学著書の多くが彼自身の創作ではなく、そのモデルとされる日本語の原本が存在していることは明らかである。おそらく謝氏の本が出版された当時の学者も、このことに気づい

27) 胡適（2003）『中國古代哲學史』、『胡適全集第5卷』所収、合肥：安徽教育出版社：214。

28) 胡適（2003：235）

29) 謝无量（1923）『詩經研究』、上海：中華書局。

30) 諸橋轍次（1977）「〈回顧〉私の履歴書」、『諸橋轍次著作集 第10巻』所収、東京：248。

たと思われる。前述した梁漱溟は『陽明学派』における指摘のほかに、または、馮友蘭（1895-1990）も謝氏の『中国哲学史』と高瀬武次郎の『支那哲学史』との関係について察知していると思われる。

馮友蘭は北京大学の哲学門に入学して間もなく、謝無量の『中国哲学史』を入手したとともに、趙蘭坪が翻訳した高瀬氏の『支那哲学史』を読んだという。馮友蘭は自著の『中国哲学史』において、高瀬氏の『支那哲学史』は雑多な歴史史料を使用していることに非常に不評で、「哲学史ではなく、兵学史や文学史を読んでいるような気がしている」<sup>31)</sup>と批評している。馮氏は当書の孔子研究に関する部分に「『論語』で言う「孝」は、服従、養志、幾諫など、すべて「孝」の方法であり、「孝」の原理ではないので、論及していない」<sup>32)</sup>と注をつけているが、これは明らかに謝著『中国哲学史』の孝に関する論述を批判したものだ。事実、高瀬氏の『支那哲学史』においては「服従」、「養志」と「諫言」については書かれておらず、謝著『中国哲学史』の「孝弟」の一節は蟹江義丸の『孔子研究』を翻訳したものである。馮友蘭は高瀬氏の『支那哲学史』と謝無量の『中国哲学史』をよく読んで、謝無量の『中国哲学史』が実は前者を翻訳していることに気づかないはずがない。したがって、馮友蘭『中国哲学史』において謝の著書を言及することに避けている理由だと思われる。謝氏『中国哲学史』の事情を察し、近代の研究者は当書を無視するあるいは回避するのも当然である。蔣夢麟（1886-1964）は民国学術界の気風を厳しく批判したことがある。

讀者試觀今日之出版物中，有明明抄襲而成也，則美其名曰著；明明轉譯自日文也，而曰譯自英文、法文或德文。夫對於金錢不忠實，不可以為商；對於行為不忠實，不可以為人；對於知識不忠實，其可以言學術乎？<sup>33)</sup>

確かに、謝無量の哲学研究書の多くは完全の自作ではないが、翻訳本としても近代中国の哲学研究史に対してその貢献を完全に抹殺する道理はないと思われる。陳來氏は謝無量と日本学術界との関係について、「今の私たちは当時の人と非常に異なっているところがある。それは知的財産権の私有性をあまりにも強調しすぎて、そのかわりに文化が伝播すること自体の積極性と公共性を無視している」<sup>34)</sup>と指摘している。謝氏は日本の中国哲学研究を中国へ導入し、後の研究に積極的な影響を与えていることは確かである。彼の貢献は中国哲学研究の草創期の背景において考察すべきだと思われる。

20世紀初頭の中国学界では、梁啓超（1873-1929）をはじめとして、章炳麟（1869-1936）、王国維、蔡元培（1868-1940）などの研究者は日本の支那哲学・東洋哲学研究に接触し、翻訳や批評も行っている。<sup>35)</sup> 1899年、梁啓超は『清議報』において「支那哲学」というコラムを設置し、譚嗣同（1865-1898）の「仁学」を掲載した。同時に梁氏が日本の知識資源を利用して中国国内に紹介した新學説と新思想の

31) 馮友蘭（2017）『中國哲學史上』、『三松堂全集（第二卷）』所収、鄭州：河南人民出版社：260.

32) 馮友蘭（2017：318）

33) 蔣夢麟（1919）「和平與教育」『教育雜誌』11(1)：12-13.

34) 陳來（2021）「中國哲學史的學科屬性與方法」『中國哲學史』4：7.

35) 桑兵（2010）「近代“中國哲學”發源」『學術研究』11：5-8.

ほかに日本の中国哲学研究も多く含まれている。後に王国維は哲学を中国の「固有の物」<sup>36)</sup>と見なし、日本の哲学研究全般特に中国哲学研究の部分を積極的に紹介し、独自の研究を始めた。それと同時に、遠藤隆吉（1874-1946）の『支那哲学史』、木村鷹太郎（1870-1931）の『東洋西洋倫理学史』など中国哲学の著作も翻訳された。その他、蔡元培が1910年に出版した『中国倫理学史』も日本の学者木村鷹太郎の『東洋西洋倫理学史』と久保得二（1875-1934）の『東洋倫理史要』との二書から編訳したものである。

明治期における中国哲学研究の系統的な導入したものは、その数も質も、いままでの学者は謝无量に及ばないことは確実である。前述の歴史事情から見れば、謝无量による一連の中国哲学著書は、翻訳本にせよ、自作にせよ、その創作自体こそ近代中国学界が日本の中国哲学研究を模倣していることの投影である。日本の学者が東西哲学を融合した成果を借りて、謝无量は中国古来の「思想」材料を「哲学」に変える概念転換を実現し、「以西釈中」（西洋哲学のコンセプトによって中国思想を解釈する）という中国哲学研究のモデルを確立し<sup>37)</sup>、その後の中国哲学研究の基本的な方向及び方法を開拓した。その意味で「1916年の謝无量の『中国哲学史』出版は、中国学界が西洋の「哲学」概念を受け入れ、我が国の伝統経学を整理する序幕を開いた」<sup>38)</sup>という定位を理解するのが適切かもしれない。

一方で、謝氏が日本の研究蓄積を利用し、自国の中国哲学史研究の草創期を開いたことは、中国における日本の関連研究成果の影響が頂点に達したことを示していると言える。蔣維喬（1873-1958）氏は「『中国哲学史』については、我が国の書店で五、六部以上が出版されているが、我が国の学者が自作した未完成の一、二部を除けば、その他のすべては日本人が作った『支那哲学史』から翻訳したものである」<sup>39)</sup>と批評した。葛兆光氏は蔣氏の言葉を「言い過ぎかもしれない」<sup>40)</sup>とされていたが、実は当時の実際の状況である。

前述したように、謝无量の中国哲学研究が主に取り入れたのは、明治後期の井上哲次郎を中心とした帝國大學の出身者のグループのものである。井上らは日本の中国哲学研究、ないし東洋哲学研究の主流の地位を占めており、儒学を尊重する保守的な姿勢も中国の学者にとって受け入れやすい。謝无量の中国哲学研究は井上派の中国学界における影響の重要な例である。日本近代の中国哲学研究について、嚴紹盪氏は次のように評している。

日本中國學領域中，最早是從“中國哲學”開始實現對傳統漢學“蛻皮”的，但是，它又是在近代日本中國學領域內，在諸學科中最後一個完成近代學術轉化的學科，大約一直到戰後，“中國哲學”才真正脫去了儒學的維護體制秩序的色彩，而成為真正近代意義上的人文學術。<sup>41)</sup>

36) 王国維（2009）「哲學辯惑」、『王国維全集：第14卷』所収、杭州：浙江教育出版社、8。

37) 喬清學氏は「これまでの中國哲学研究は、基本的に「以西釋中」というモデルしかなかった」と述べた。喬清學（2014）「中國哲學研究反思：超越“以西釋中”」『中國社會科學』11：49。

38) 林美茂（2021）「“哲學”的接受與“中國哲學”的誕生」『哲學研究』4：53。

39) 蔣維喬，楊大膺（1934）『中國哲學史綱要：上卷』上海：中華書局：3。

40) 葛兆光（2006）「道統、系譜與歷史——關於中國思想史脈絡的來源與確立」『文史哲』3：53。

41) 嚴紹盪（2009）『日本中國學史稿』北京：學苑出版社：198。

日本中国哲学研究という「最早」、「最遅」の二重の特性は、中国の学界で主導的な地位を占め、また必然的に欧米留学の胡適、馮友蘭らの批判と超越の対象となることを決定した。梁啓超・王国維・謝无量・胡適・馮友蘭などの学者らは日本の学術成果を参考・模倣・反省し、中国における哲学研究の現代的転換を促し、その以後の中国独自の研究を推進した。本稿はこの重要な問題には敢えて踏み込まなかったが、今後の課題として引き続き研究を進めたいと思う。

### おわりに

本稿は中国哲学研究の先駆者として謝无量が参考している日本の文献を調査し、謝氏が署名した哲学著書とそれぞれの日本語原本との関係を指摘し、中国哲学研究史におけるその役割と影響を考察したものである。

全体的に見ると、謝无量のすべての哲学著作は日本書を参考にしたのか、今はまだ断言できないが、謝氏の中国哲学研究は明治日本の学術に深い影響を受けていることは確実であり、多くの著書はほとんど日本語の種本にもとづいて作り上げた「翻訳本」と考えてもよい。具体的に見ると、『老子哲学』『孔子』『中国哲学史』『陽明学派』『詩経研究』はほとんど日本語の種本を翻訳して出来たものであり、わずかに一部の内容が自作とされている。一方で、『仏学大綱』は複数の著作を融合させたものであるが、その中でも謝氏独自の見解が多いはずである。

謝无量の哲学研究書の多くは完全の自作ではないが、日本の中国哲学研究を中国へ導入し、「以西积中」という中国哲学研究のモデルを確立し、後の研究に積極的な影響と刺激を与えていることは事実である。以上のような事実関係を明らかにした上で、謝无量にとって中国哲学研究史とはどのように位置づけられていたかを理解することができる。謝无量だけでなく、日本の学術成果に対する参考、模倣と反省は、近代中国の中国哲学研究の形成において無視できない段階である。このことは今後の謝无量研究、中国哲学研究史において重要な意味をもつと思われる。著者の力不足から、上記以外の謝氏の哲学研究書や、文学研究書と日本の関係については、まだ十分な考察ができなかった。今後研究に託したい。

#### 【付記】

本研究は、中国河北省教育厅科学研究項目 BJS2024052 の助成を受けたものです。